アンハラッド・ベケット教授の紹介をさせていただきます。

ベケットさんは、リーズ大学社会学・政策学部の教授であり、障害学分野で卓越した実績を持つ同大学の障害学センター長をつとめた経験を持っていらっしゃいます。そしてベケットさんは、社会の変革のために卓越した技芸上の業績により、ロイヤル・ソサエティー・オブ・アーツ・フェローの栄誉称号を持ってらっしゃいます。さらに社会学、障害学分野の功績により、2023年10月に、英国の社会科学院のフェローにも選出されています。

そうした素晴らしい功績を持つベケットさんに私が最初にお会いしたのは、2018年に台北で開催された障害学国際セミナーでした。障害学国際セミナーは、本研究所の創設者である立岩真也さんの遺産でもあります。ベケットさんは、台湾で障害者の権利条約の中で私がひいきの30条が取り上げている遊ぶ権利について批判的障害の観点から基調講演をしてくださいました。その後、ビールを飲みながら、いつか障害学の仲間を世界中から集めて会議や交流をしたいと夢を語り合いました。今回の来日は11月中旬に、その台北で開催される台湾社会学会大会の基調講演でいらっしゃると、障害学国際セミナーのパートナーである台湾障害学会の前の会長、張恒豪先生から耳にしたので、折角台湾までいらっしゃるなら日本も是非にとお願いして実現したものです。

ベケットさんが初代編集長として、2021年11月に発刊した障害学の新たなジャーナル（International Journal of Disability and Social Justice）「障害と社会正義に関する国際ジャーナル」の編集委員構成には、こうしたベケットさんの東アジアのネットワークが活かされ、香港、中国、台湾、日本などからの委員が含まれています。

また、ベケットさんが書かれ、非常に注目されている論文が「障害の社会モデルと人権モデル：相補論に向けて」です。この論文は、同じリーズ大学の同僚のアナ・ローソンさんと一緒に書かれ、国際人権ジャーナルに2020年に掲載されています。この論文は、それまで明確でなかった社会モデルと人権モデルの関係について明らかにしている画期的なものです。社会モデルと人権モデルの関係については、昨年秋に日本に対して出された障害者権利委員会の総括所見でも言及があったことから、改めて注目を浴びています。このテーマについては、この後、東京大学の研究会や日本障害フォーラムの全国フォーラムで講演をされます。

本日は、「脆弱なパーソン（人）であることと社会的排除」というテーマで、新型コロナウイルス感染症の影響や、エイブリズム（健常者中心主義）についても触れていただく、貴重なご講演をいただきます。